

所	属	国際地域学研究科	国際観光学専攻	2年	3820170004番
氏	名	鈴木	香澄		
学	位	の	種	類	修士(国際観光学)
学	位	論	文	題	目
論	文	審	査	委	員
		主	査	島	川
		副	査	矢	ヶ
				崎	紀
				子	

## 論 文 要 旨

The role that the travel industry achieves is divided into an economic role and social role. This is a case that the world adapts itself to every country. The economical share of the tourist industry is emphasized at a developing nation. When I look back on development of Japanese tourist industry, it can be said that it has grown with financial development after the war. When I go back up to now from the early stage of the package tour, price destruction of travel goods has occurred by excessive competition's being developed. And more, it influenced a decline of the travel quality. It increases in needs of OTA and LCC in Japan of recent years. But a package tour is a principal axis of Japanese travel. A package tour changes into a flow in the time. A package tour becomes the driving force which has made overseas travel grow from this thing. It'll be the one which expresses a background in the time to look back to a package tour with the time. Therefore, the package tour which has looked back to the package tour which is the overseas travel form of the Japanese once again with development of "LOOK JTB" and "JAL PAK" under the environment of the severe sightseeing by this paper, has inspected and has undergone influence of world situation, it's investigated with history of overseas travel. And this research was performed to search for a possibility of the future's package tour.

Keywords : Japan Travel Bureau Foundation, Japan Airlines Co., Ltd., Minimum Tour Price, Overseas Travelers, International airfares

### 1. 本研究の背景と目的

旅行業の果たす役割は、経済的役割と社会的役割に分けられる。これは世界どこの国にも適応することであるが、発展途上国では特に経済的役割が重視されている。日本の旅行業の発展を振り返って見ると、戦後経済の発展とともに成長してきたといえる。

旅行業幹旋時代と呼ばれる時代には、旅行業は国鉄の付属業務に過ぎなかったが、日本旅行やJTBはやがて自社のパッケージツアーを販売することで国鉄の支配から脱出し、独立の企業として旅行産業の先頭を走り出した。戦後の経済復興期から、特に1964年海外渡航自由化以来、旅行業は経済の発展とともに著しい成長を遂げた。この年に行われた東京オリンピック大会の影響で、国民の海外旅行が自由化され、海外パッケージツアーが誕生した。この年に発券されたパスポートは、前年比34.8%増の12万4000冊に達した。この過程でパッケージツアーは、「便宜性」「安心・安全の担保」「低価格」「快適性」の4点に優れている商品として旅行会社の主力商品となっている。この意味から、パッケージツアーは日本の旅行産業を支えてきた根幹であり、日本の旅行業界の歴史はパッケージツアーと共に歩んできたと言っても過言ではない。1964年の自由化当初、13万人弱であった日本人出国者数は、ピーク時の2012年には約1,849万人まで伸長した。この数字の正確な内訳は出ていないが、その多くはパッケージツアーであることは容易に想像できる。しかし、パッケージツアーは、販売当初は決して安い物ではなかった。日本のパッケージツアーは他国と比較して非常に高価なものであった。日本人の月給の何倍もする価格で海外旅行に行くことが当たり前だと思われていた。その後価格は値下がりしたものの高価なものであることに変わりなかった。このように、日本のパッケージツアーは高価であったとはいえ、日本の旅行業を支えてきた重要な要因である。現在も、JTBグループの海外航空券の総取扱高の4割以上をいまだに「ルックJTB」が企

画・催行しているJTBワールドバケーションズが占めている。ところが、パッケージツアー過当競争が進む中で旅行商品の価格破壊、それに伴って旅行品質の低下にまで影響が及ぼされた。一方「ジャルパック」は、NPS®ベンチマーク調査2017において、トラベル部門で1位を獲得し、国内外のOTAが進出するなかでも、利用者から非常に高い評価が集まった。「イメージブランドの良さ」に加え、「サービスの信頼性」「プランの品質の信頼性」「柔軟なプラン設計」でも業界トップクラスの評価となった。近年のジャルパックは、商品に力をいれ、顧客満足をあげるための工夫を実施している。近年の日本では、OTA、LCCなどのニーズが増加しているが、パッケージツアーこそ、今までの日本人の旅行の好奇心を満たし、時代の流れの変化に対応しながらも、海外旅行を成長させてきた原動力となっている。また、各年代のパッケージツアーを遡ることにより、時代の背景を表すものとなる。

そこで、本稿ではこのような厳しい観光の環境下で日本人の海外旅行形態であるパッケージツアーを旅行会社主導で発展した「ルックJTB」と航空会社主導で発展した「ジャルパック」の歴史を再度振り返って検証し、世界情勢の影響を受けてきたパッケージツアーを海外旅行全体の歴史とともに見つめ直し、今後のパッケージツアーの可能性を探求するために、本研究を行った。

## 2. 本論文の構成

本稿では、海外渡航が自由化される前からのパッケージツアーの歴史と、国際航空運賃の変化を考察したうえで、日本のパッケージツアー、主にジャルパックとルックについて発展と直面している課題を研究してきた。この研究を通じて、今後のパッケージツアーにどのような対策、新たな展開をすることで今後の可能性があるのか提示した。

第1章では、山野辺（1992）、玉村（1991/1993/1999/2003）、王（2005）、竹中（2011）、石井（2016）の計8本の論文、書籍を先行研究とし、主に「ルックJTB」と「ジャルパック」にフォーカスを当てて、パッケージツアーのルーツから過当競争期までの先行研究レビューを行った。

第2章では、パッケージツアーの生成とルーツ、国際航空運賃の歴史的变化について研究を行った。パッケージツアーの最初のはじまりは、世界的に見ても、近代の交通手段として、鉄道、航空機が旅行者を安全に輸送することを可能としたことが始まりである。そして、パッケージツアーの最初の形態は斡旋による団体旅行の特質が目立った。トマス・クックを創始者と言うためには、いくつかの前提が必要である。第1に、旅行業を専業として行い、かつ現代まで継続し得たこと、第2に、上に挙げた旅行業が行う

- ① 交通・宿泊等の予約手配業務
- ② 目的地において到着する客の旅行を斡旋するランドオペレーター業務
- ③ 市場内で不特定多数のために事前にセットした旅行商品（パッケージツアー）を生産・販売する

以上、業務の全てを行ったという点である。

日本では、日本旅行の創業者、南新助が高野山参拝、伊勢神宮参拝を企画し国内初の企画旅行の発祥といえる。しかし、南新助の参拝旅行は団体斡旋の特質であり、現在の意味のパッケージツアーとは異なる。

国際航空運賃の歴史的变化は、日本のパッケージツアーに深いつながりを持ち、影響を与えていった。まず、IATAの設立で航空市場をカルテルすることとなり、世界中で高価格運賃は長い間維持されることになった。日本は、第二次世界大戦後、日本国籍の航空機の飛行を禁止され、外国籍の航空機のための飛行となったため、6年間は自国の航空輸送は不可能であった。その後の1952年4月にサンフランシスコ平和条約の発効以降、自国の航空企業の実設が認められた。

第3章では、戦後の旅行形態について研究を行った。

戦後の旅行斡旋実態を研究し、進駐軍及び家族、在外邦人の母国訪問、文化やスポーツ交流などの斡旋を通じて、旅行業の基盤が整備されていた。1953年以降、優良個人客を対象とした斡旋旅行で手一杯だったことで在留外国人に対してのニーズに対応しきれなかった。そのため、気軽に参加でき、より効率的な取り扱いが求められ、パッケージツアーが誕生した。パッケージツアーの誕生から、旅行業が受注型から生産型への転換がされた。

第4章では、1960年代の海外渡航自由化を機にパッケージツアーが発展していく様子を研究した。

1964年に、海外渡航が自由化され、同時期に日本航空が「ジャルパック」を登場させた。しかし、当時の大卒の初任給が約2万円であったころ、ヨーロッパのパッケージツアーはおよそ62万5千円、ハワイで30万円する高額商品であったた

め、自由化されたものの、一部の富裕層しか参加することができなかった。しかし、ジャルパックの前に、日本交通公社が1963年に、日本初の海外パッケージツアー「JTB海外旅行シリーズ」を誕生させている。

1960年代は、航空会社主導型のパッケージツアーが主流であった。当時、旅行会社にはパッケージツアーを宣伝するノウハウが乏しかったことが主な理由である。ただ、幹旋旅行からスタートした旅行会社は団体旅行の受注から市場を拡大することに成功した。

1960年代後半には、ジャルパックは、ホールセールの道に進むか、リテーラーの道に進むかを検討したが、ホールセールの道を進むことを決定した。このとき、ジャルパックは数多くある既存の旅行会社の経営を圧迫してしまうことを指摘され、旅行会社とともに歩む道を選択した。

第5章では、航空機の発展と航空運賃について研究を行った。

1970年代に入り、ジャンボジェット機による大量輸送を可能とした。これをきっかけに、供給の増大に対応するため、パッケージツアーの開発に力をいれた。

同時に、既にIATAによってGIT運賃の導入はされていたものの、それほど安いものではなかった。大型機を導入したとしても、座席の供給過剰であっては、空の飛行機を飛ばしてしまうことを恐れた。それを解決するために、強力な団体運賃割引（バルク運賃）を導入した。しかし、旅行会社のパッケージツアーは売れ残ることも多々あり、このような状況では、旅行会社は団体用の航空座席を裏で、ばら売りして、客観的にエアオン市場とFITの成長を促した。

第6章は、パッケージツアーの過当競争の背景について研究を行った。

バブル経済の時代、パッケージツアーは好景気の下で、量・質両面で真の競争の時代を迎えて、バブル崩壊後、安価化と少人数化が進んでいる。1990年代に入って、規制緩和の影響もあり、ディスカウンターは実力が強くなった。ディスカウンターの参入はパッケージツアーの価格の下落につながる同時に、FITの成長を促進していった。

第7章では、世界情勢によって左右されたパッケージツアーの研究を行った。

2000年代に入り、海外渡航者数も大きな伸びを見せてはいたが、2001年の同時多発テロの影響、2003年には、SARSとイラク戦争の影響から海外旅行者数が減少し、旅行会社にとって受難の時代となった。結果、2003年には、過去最高数の旅行会社の倒産数を記録した。

第8章では、日本のパッケージツアーが直面している課題について研究を行った。

近年、パッケージツアーの価格の下落につながる同時に、FITの成長を促進している。パッケージツアーはその影響を受けて、スケルトン・パッケージになりつつある。同時に、インターネットの普及によって、パッケージツアーは新しい挑戦を迎えた。インターネットによる素材のダイレクト販売が、パッケージツアーの利用者を奪い、パッケージツアーの中身を空洞化し、パッケージツアーの利益の基盤となる航空券のコミッションのレスと手配手数料の低下につながっている。

### 3. 結論

近年、FITの成長、ダイナミックパッケージの登場、インターネットによる素材の直販はパッケージツアーに大きくインパクトを与えている。しかし、海外旅行に出かけていない人も多く存在し、パッケージツアーが持つ「利便性」「安心・安全の担保」「低価格」「快適性」の優れた点は、初めて海外に旅行する人々にとっては優れた点となる。海外旅行の経験者にとっても、パッケージツアーが不可欠であるため、パッケージツアーが消えることはないであろう。新しい需要創造としての商品企画の工夫とインターネットによる販売手段の革新はパッケージツアーが今後生き残られるかどうかの大きなポイントになっている。

